

全国の大学生と交流!!

# 宮城招聘プログラム



11月3日から5日にかけて宮城招聘プログラムが開催された。この企画は、過去に被災経験のある熊本、福岡、神戸の大学生を宮城に招き入れ、実際に宮城県の復興過程や今後自分の地域に関わるにはどうしたらよいかを学ぶのを狙いとしている。

1日目は「つながりデザインセンターあすと長町」の代表理事の飯塚正広さんの講演を聞いた。仮設住宅の老朽化や震災初年度の仙台市の行政との激しい論争、住民同士のコミュニティ形成等の仮設住宅の現在までの課題を教えていただいた。学生にできることは、ボランティアに積極的に参加すること、メディアやSNSを通じて現状を周りに発信していくこと等の簡単なことの積み重ねではないだろうか。

2日目は、旧仙台市立荒浜小学校と南三陸町志津川地区に訪れた。荒浜小学校は、校舎が半壊したが荒浜地区に住む地域住民も含む320名が避難し全員が助かった。この背景として挙げられるのが、当時の校長と避難してきた各町内会の会長の迅速な判断だった。日頃から避難



訓練を続け、回数を重ねていく毎に質を高めていった。逃げる時だけでなく避難後のノウハウもあつたので、食事の配分や二次災害時の対応能力も自然と身についた。

午後は南三陸町へ移動した。今回の東北学院大学の参加者の中に志津川出身の学生が2人いたが、

その方々に語り部をしていただいた。2年生の佐藤美南さんと西城皇祐さんだ。語り部の内容は、南三陸町の概要と自身の経験談だった。震災時に大好きだった叔母を気仙沼で亡くしており、感謝の気持ちを言えずに別れてしまったことを本人は今も後悔している。そして、震災後1年地元を離れたことで、南三陸の魅力に気づいた。やがて地元が大好きになったそうだ。被災した経験を1人でも多くの人に伝えたい思いが彼女が語り部活動をする契機である。自身の経験から参加者に向けて「友達、家族を大切にすること」、「自分の地元に着用を持つこと」、「後悔しない生き方をする」ことが大切と仰っていた。

3日目は石巻専修大学の山崎ゼミでワークショップを行なった。議論内容は、石巻の今後や、防災大国としての日本のこれからについてだった。

今回私は初めて招聘プログラムに参加したが、普段関わらない学生とお互いの活動や地域を熱く語り合え、有意義な時間を過ごせた。今後も繋がりを大切に活動に繋がっていききたい。

(柏凌太)



## 参加者インタビュー

### Q1 参加した理由

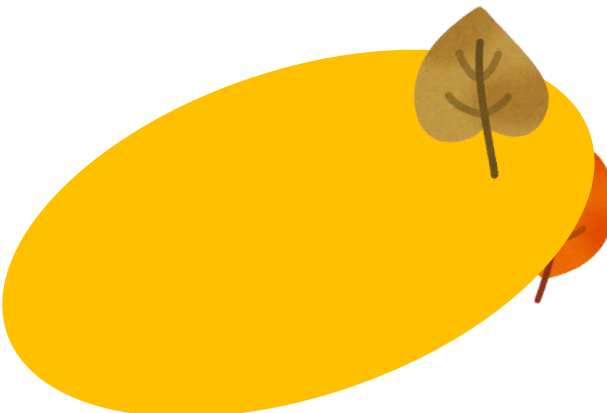
・僕が参加した理由は「地元熊本で発生した地震による被害状況や発生から1年以上も続けている僕たちのボランティア活動の成果を東北や神戸など全国各地の大学生に知ってもらいたかったから。また、実際に東日本大震災の現場へ行き、当時の状況やボランティア活動を通してどんな成果があったのかを自分の目で確かめたいと思ったからです。」  
(熊本学園大3年 男子)

・全国の復興地から集まった学生が地元でどのような災害支援を展開しているのかを知りたかったからです。また、その活動共有を聞いて自分たちの活動に活かしていけたらと思います。参加しました。  
(神戸学院大2年 女子)

### Q2 感想

・実際に東日本大震災の現場に足を踏み入れ、熊本地震との被害の共通点や違いを知ることができた。また、個人的に荒浜小学校を見学させていただいた時は衝撃的だった。熊本は津波が発生しなかったのに、津波がどれだけ私たちの生活のすべてを奪うのか、また、当時小学校にいた子供たちの不安や恐怖の気持ちを考えると、非常に怖い。宮城各地の大学生や神戸の大学生、福岡の大学生など、こんなに多くの学生が災害ボランティアに対して意識を持っていてくれるのだと非常に嬉しかったです。  
(熊本学園大3年 男子)

・3日間、同じ志を持った同年代の学生に刺激を受け、震災当時から現在にかけての苦労を直接聞いて見ることで、これからの活動により磨きがかかりました。また、神戸とは違い東北は震災跡地が多く残っているため、恐ろしさをリアルに感じる事ができました。  
(神戸学院大学2年 女子)



宮城県雄勝町は石巻市の北東に位置し太平洋に面している魅力の詰まった町である。特産品はホタテやウニなどの海産物や、雄勝硯などの工芸品があげられる。人口は約1600人ではあるが町には活気と温かさがあふれている。観光名所の1つでもある雄勝ローズファクトリーガーデンでは色とりどりのきれいな花を見ることができ、心も体も癒やされる最高の場所である。ボランティア活動で雄勝町を訪れると地域の人達が気さくに話しかけてくれるため、実家に帰ったような温もりや落ち着きを味わえる。訪れた人の心を和ませる町、それが宮城県雄勝町なのである。

秋のボランティア活動、通称「秋ボラ」では、11月18～19日にローズファクトリーガーデンでの作業と被災地ウォークを中心に活動してきた。1日目の被災地ウォークではスタッフが語り部として参加者の人達に東日本大震災当時の状況や背景を伝え、震災に対する知識がいかに大切なのかを学んでいった。この活動で今住んでいる地域を知ることや、震災が起きたときどう行動するのか家族で話し合うことなど、備えることの重要さと命の大切さを改めて学ぶことができた。すくすくと育ってきたオリーブの木が今年の寒い冬を越えてどう成長していくのか楽しみである。

秋ボラを通して現地の方々と話したとき、「ボランティアに来ていただくことで町が明るくなる」と嬉しい言葉をいただいた。このような言葉を胸にこれからも雄勝町の人々の心を明るくするようなボランティアをしていきたい。

(小野寺泉葵)



今回、私が2日間の秋ボラを通して感じたことは“復興とはなにか”ということである。

この答えは個々人で異なるが、秋ボラに参加する前の私の中での復興とは、住民の方々が震災以前の住居、暮らしを取り戻すことだと考えていた。

しかし、「本当の復興とは住民の方々がそこに生きる希望を生み出すことが重要だ」と語り部の方はおっしゃっていた。私はその時今回のメインであるローズガーデンでの活動が復興の足掛かりになるだろうと考えた。活動内容としては土運びや植樹など力仕事が多いものの、他大学の方と協力し、自ら積極的に活動を行なうことができた。

そして、私はローズガーデンで活動をして間もない頃に現地の方がされた話を思い出した。それは機械に頼らず人の力でこのガーデンを完成させたいというものだ。確かに機械に頼れば短時間で形になるが、機械には感情が込められていない。この点においても、今回の秋ボラでは良い活動を行なうことができたと思う。(佐藤潤弥)



私は、雄勝町での秋ボラの活動を通して感じたことが2つある。

まず、1つ目は、東日本大震災による雄勝町の被害は甚大なものだったが、少しずつ復興に向かって進んでいるということだ。私は、語り部で旧雄勝小学校が津波によって1キロ流されたということを知った。また、被災地ウォークで被害を受けた場所を歩いたときは家が全く無かったが、震災前の雄勝町の街並みの写真には家が多くあり、こんなにも多くの家が津波で流されてしまったのかと悲しい気持ちになった。しかし、雄勝小中学校が開校したりコミュニティの中心となる店こ屋商店街ができたり少しずつではあるが復興の兆しが感じられて良かったと思った。

次に、2つ目は、雄勝町の方はとても温かいということだ。私達のために豚汁の差し入れやローズガーデンでの作業の手順を丁寧に分かりやすく説明してくださるなど、温かく接して頂いた。人の温かさが雄勝の魅力でもあると私は感じる。これからも雄勝での活動に積極的に参加していきたいと思う。(高橋侑希)

# 牡鹿半島

## 「スタディーツアー・カキ祭り」

宮城県石巻市牡鹿半島小湊浜・給分浜現地交流会・スタディーツアー、通称カキ祭りは今年で3回目の開催となる。2017年12月3日(日)に行なわれた今回は、12月とは思えないほど温暖で、穏やかな晴天の下で開催された。当日は40名の学生が参加し、現地の住民さんも会場に大勢お越し頂いて、カキ祭りは大きな盛り上がりを見せていた。

午前中はスタディーツアーが行なわれ、学生がバスで石巻市内の被災地各地を回った。学生スタッフからは石巻市街地と牡鹿半島の2つの浜での状況説明がされた。昨年11月と同様のルートだったが、1年ぶりに同じ景色を目の当たりにしても、ほとんど1年前と変わらない世界がそこには広がっていた。まるで時が止まっているのではないかという感覚を覚えた。参加者の方々も、震災から7年を迎えようとする被災地の姿から様々な思いを感じたのではないだろうか。

そして、午後からはメインイベントであるカキ祭りが開催された。大ぶりのホタテ、濃厚なカキ、ふっくらとしたアナゴなど、沢山の新鮮な海産物が、普段ボラステの活動でお世話になっている漁師の方々から振る舞われた。牡鹿半島の大きな魅力である海の幸を味わいながら、学生と住民さんが交流し和気あいあいとした雰囲気広がっていた。交流会の中では、本学のアカペラサークルである **rix** M i x さんからステージ発表もしていただき、音楽の力で会場をさらに盛り上げてくださった。海産物という大きな魅力に沢山の人が触れられたこと、それを通して人々のつながり・関わりが生まれたことは、参加した方々にとって記憶に残る、またこの地に足を運んでいただくきっかけ

になるイベントを開催できたと感じている。

カキ祭り開催の背景には、牡鹿半島という地域が抱える「少子高齢化」「人口減少に伴うイベントの減少」という2つの問題がある。会場に足を運んで頂いた住民さんの多くはご高齢の方であった。私は昨年から牡鹿半島での活動を行っており、これまでも何度もイベントを開催してきたが、その度に「また開催してほしい」「今日は来てくれてありがとう」といった現地の方の声を頂く。2つの問題がそれだけ深刻だということ、地域に活気がなく淡々とした生活が今もなお続いていることを痛感した。我々の活動は来年以降も継続していくが、お世話になっているの方々、地域に感謝・貢献するという意味でも、このようなイベントを今後も開催する必要性があることを改めて実感させられた。

(佐々木優樹)



### 参加学生と住民さんにインタビュー！！

**Q** 参加した理由は？

牡鹿の町がどのようなところか気になったから。

(東北学院大学 女子)

今年の夏ボラに参加してこの牡蠣祭りにも来たいと思ったから。夏ボラと今回を通して、学生さんを受け入れてくれる住民さんの寛大さや美味しい海の幸など牡鹿の魅力を感じることが出来た貴重な機会だった。

(立命館大学 男子)

**Q** 感想

災害ボランティアというものは初めは難しそうな印象で身構えていたが、この牡蠣祭りのようなイベントも開催しており楽しむことができた。またスタディーツアーでは震災について知ることができた。牡蠣祭りは賑やかで、自分の地域の高齢者と日頃話さないの、現地の方々の温かさを感じられた。

(東北学院大学 女子)

スタディーツアーで津波に流されず残った一軒を見て、人は戻って来づらくなることを感じた。地域内で人の呼び込みをするのは大変そうだが、このようなイベントで学生が来ることによって活気づけていければよいなと思った。これからもボランティアは継続して行なっていきたい。また、この牡鹿の魅力を家族や友人に伝え、自分だけではなく周りにも広めていきたい。

(立命館大学 男子)

震災での水害もあったため牡鹿は寂しく、人がいなくなつた。だから人が集まっているところに出たい。今日久しぶりに会えた人もいて沢山話することができた。

(住民さん)

# 第7回大学間連携災害

## ボランティアシンポジウム

平成29年度大学間連携災害ボランティアシンポジウムが12月16日(土)、本学土樋キャンパスホワイ記念館にて開催された。「被災地支援に期待される学生ボランティアを考える」と題し、全国各地から計11大学の学生・教職員が集い、被災地の現状と課題を学び、学生ボランティアに期待される役割について再認識する機会となった。

シンポジウムの基調講演では「支援と受援の社会学」災害多発時代を乗り越えるために」と題し、関西大学社会安全研究科・同准教授の菅磨志保氏よりご講演頂いた。菅氏は阪神・淡路大震災、新潟県中越地震そして東日本大震災を比較し、どの震災でも被災者への直接的支援から住環境・コミュニティづくりなど長期にわたる支援へと支援の内容が変化していくと指摘した。それぞれの震災での支援をこれから発生する災害に備え、記録として書き留めておくことが重要であると仰っていた。

市民フォーラムでは、「宮城県名取市における地域コミュニティ再生の試み」と題し震災後、復興公営住宅で生活なさっている宇佐美久夫氏、長沼俊幸氏から現在の暮らしぶりを話して頂いた。宇佐美氏は復興公営住宅自治会役員としての立場から、地域コミュニティ再生に対し学生ができることは学生なりのアイデアで入居者の方と関わっていくことであると仰った。長沼氏はもう一度、故郷である閑上地区での地域住民の結びつきの強かった生活を取り戻したいと願っており、学生ボランティアにはこれからも会いに来て欲しいと仰った。

名取市で被災者サロン運営事業を展開する「どつと・なとり」の菊地麻理子氏は、事業を継続していくにつれて参加する住民の自主性を促すことができ、今では住民からイベントの提案があるなど震災当時と心境に大きな変化がみられると仰った。学生ボランティアに対してはボランティアを行なった時だけでなく、人と人の繋がりを大切に寄り添って欲しいと仰った。名取市を拠点として活動している尚絅学院大学ボランティアチーム T A S K I の

伊藤ちひろさんは、つなげる、つたえる、つづけるを意識し、これからも住居者への支援を行なっていきたいと仰った。

各大学の活動報告の場として設けられたリレートークでは、全国から集った11大学の学生らが登壇し、阪神・淡路、東日本、熊本など各地での震災ボランティア活動の報告を行なった。

その後、学生・教職員・一般の方に分かれ、意見交換の場を設けた。学生の分科会では10名程度のグループをつくり、クロスロードと呼ばれる災害時を想定したお題に合わせYesかNoを答え個々人の防災意識をゲーム感覚で学び合うグループワークを行なった。様々な意見が挙げられ盛んな議論の場となった。

今回のシンポジウムを通して学び得たものを今後の活動に生かし、被災者に寄り添いながら活動を継続していきたい。  
(柳沼康平)

### 【参加者インタビュー】

昨年も参加し、この1年間で様々なボランティアを経験してボランティアに対する考え方も変わりました。また、新たな繋がりも見つきたいと思い参加しました。ボランティアチーム内で避難所での支援について勉強中で、今回の基調講演で学んだ記録に残すという取り組みを行なっていきたいと思いました。  
(神戸学院大学・女子)

中央大学から東北学院大企画の夏ボラに参加した方がいて被災地支援に関心を持ち、今回のシンポジウムで他大学からの情報を吸収し中央大学の方向性を見つけたく参加しました。市民フォーラムを通して復興支援型のボランティアを行なう際、何のために行なうか目的を明確にする必要があると感じました。  
(中央大学・男子)

夏ボラに参加して被災地支援への関心が増し、他大学の活動を知りたいと思い参加しました。多様な活動があることが分かり、他大学の取り組みを模範に今後は参加するのではなく、自分で企画をする活動をしていきたいです。  
(中央大学・女子)



# 新企画!

## 【ボラステ活動グループ紹介】→→→気仙沼グループ



私たち気仙沼グループは、主に気仙沼市の牧沢仮設住宅と反松公園仮設住宅で活動を行っています。メンバーは主に2年生が4名、1年生2名で活動しています。

主な内容としては、仮設住宅周りの草むしりやクモの巣取りなどの環境整備、クリスマス会やお花見会などを開いて、住民さん同士の交流を促進する活動も行っています。

現在、気仙沼市では仮設住宅から復興公営住宅への移転の転換期を迎えており、私たちが活動してきた仮設住宅でも住民さんの移転が始まっています。昨年度まで活動を行っていた牧沢仮設住宅でも昨年までは子どもたちもたくさん住んでおり、一緒に遊びながら活動を行っていましたが移転によって住民さんの数も減ってしまい交流する機会も減っています。また、住民さんが住まなくなった空き部屋に野良猫が棲みついてしまい鳴き声や糞の臭いなどでとても迷惑をしているといった現状もあります。私たちは1か月に1回のペースでしか活動ができないため住民さんのニーズに完璧に応えることは出来ないと思います。しかし、現地の方々には「いつもきてくれてありがとう」などと温かい言葉をかけてくださるのでとてもやりがいを感じます。これから気仙沼での活動は大きく変化していくことが予想されます。活動は1年生がメインになってきますが、これからも2年である私も協力して関わっていきたいと思います。

(気仙沼グループリーダー 小野寺貴哉)



雪って、すごい!



## 山形県豪雪地帯除雪ボランティア募集

辺り一面真っ白に染め、いつもとは違った世界をつくる。冬だけの「空からのおくりもの」が私たちに届けられます。雪国である山形県では、年間降雪量の全国平均 101 センチに対し、426 センチも積もります(気象庁参照)。そこに踏み入ると、簡単に足が埋まります。大きい雪だるまも作り放題です。

しかし、そこに住んでいる人たち、特に高齢者にとって「空からのおくりもの」はつらいものです。家に積もった雪を放っておくと、車を出せなかったり、外に出られなかったり、窓からの光を遮断し、ひどい場合はその重みで、窓や屋根を壊します。このような大量の雪を片付けるには、体力面での難しさがあります。また、屋根での雪降ろし作業で足を滑らせてしまったり、落雪で下敷きになってしまったり、雪によって見えなくなった側溝に落ちてしまったり、危険が潜んでいます。そこで、私たちは毎年山形に足を運び、除雪ボランティアに参加しています。

みなさんの力を、お年寄りのために、大切な財産を守るために、そして地域のために大きな助けとなります。私たちと一緒に、楽しくやりましょう!

### 《山形県豪雪地帯除雪ボランティア活動者募集概要》

※詳しくは東北学院大学災害ボランティアステーションHP ([www.tohoku-gakuin.ac.jp/volunteer/](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/volunteer/)) より、「募集するボランティア活動」の項目からご参照ください。

○活動期日：平成30年2月7日(水)～9日(金) 2泊3日 ○活動場所：尾花沢市内、大石田町内の1人暮らし高齢者宅等

○宿 舎：徳良湖青少年自然研修センター(尾花沢市) / 桂桜会館(大石田町) ○募集人員：50名

### ○申込方法

大学間連携災害ボランティアネットワーク参加大学、学都仙台コンソーシアム加盟大学のボランティア担当者にも本ボランティア募集を共有しておりますので、各大学のボランティア担当窓口にお問い合わせください。各大学の担当窓口が分からない方は、記載されているお問合せ先に平成30年1月19日(金)17時までにご連絡ください。

### 【申込先・お問合せ】

復興大学災害ボランティアステーション

TEL: 022-264-6522 (受付対応時間: 平日 11:00~16:30)

MAIL: [revolu@mail.tohoku-gakuin.ac.jp](mailto:revolu@mail.tohoku-gakuin.ac.jp)

## ～イベント・ボランティアのお知らせ～

・2月7～9日 山形県豪雪地帯除雪ボランティア

・各地域での活動もこれから詳細が決まるのでTwitter等でぜひ情報をリサーチしてください!!

## 編集後記

今回からボラステ通信新企画の活動グループ紹介が始まりました。

活動している各被災地で行なっていることは違いますが、この記事から皆さんに地域の雰囲気やグループのカラーを知ってもらい、参加するきっかけになっていければなと思います。

さあ、次回はどのグループを紹介するでしょうか!? お楽しみに!!

災害ボランティア

ステーション

学生スタッフ 渡辺紗彩